二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 新居　佑
挿絵 Maruto!

第一章　斬り裂く赤　006
第二章　白濁の再会　039
第三章　蝕まれる媚肉　082
第四章　恥辱との戦い　110
第五章　戦姫汚辱　167
第六章　堕落武者　209

登場人物紹介

Characters

咲夜（さくや）

一国の姫。夜な夜な武者姿に扮し、悪徳業者や怠惰な役人たちを成敗している。両親の敵を取るのが最大の目的。

高城 伸由（たかぎ のぶよし）

国の役人。欲望のまま行動するバカ男。

高城 伸盛（たかぎ のぶもり）

伸由の父。国の重臣に就き、実質的に全権力を握っている。

『第二章　白濁の再会』より

切っ先が老人を斬り裂く刹那、ピタリと止まる。
「そんな……ばか、な…」
覚えず声に出して叫んだ。
老人の開かれた胸の中……そこに見えるものに復讐に燃える姫の心が震えた。
「どうしたのですか、姫様？　わたしを、成敗……するのではなかったですかな？」
ゆっくりとした口調で、こちらを嘲るようにして喋る伸盛。その胸の中。疼く肉海にひとかけらの宝石が漂っていた。その煌めきに映り込む一人の女……。
「は、母上……どうし……」
思わず後ろの大樹を振り向き、もう一度、老人の胸の中に目を戻した。
母親だった。赤黒い海に場違いに浮かぶ宝石の中に、麗しい母の顔があった。
「言ったではないですか。母君は贄……必要なのは巫女の精であって、心ではない。これは我らが秘術で取り出した母君の命の輝き――そう、いわゆる魂です」
「――っ！」
愕然とした。頭が一瞬真っ白になり何も考えられなくなる。
そういう秘術があることは知っていた。妖夷と同じく触れてはならない外法の技。まさかそれを母に……。
唇がフルフルと震え、鼓動の速さに呼吸がついていかず息が詰まる。手足の指先までずぅと力が抜けていき、自分がちゃんと立っているのかさえわからない。

（たまし……母上の……母上、もう……そんな……）
仇を討てると思った瞬間の逆転劇に、感情をつかさどる理性が追いつかない。ただ悔しさと切なさだけが溢れた。
「つまりはこちらが本物。あそこで淫婦と化しているのは、ただ我らのために熟れた精を搾られ、垂れ流すだけの牝豚同然。おわかりいただけましたか姫様？」
何もかもをバカにしたような軽い口調。その喋りに道に迷った怒りが弾ける。
「嘘じゃ！　母上がこんな……こんな化け物どもに屈するはずがない！」
九年間、想い続けてきた母親の面影を笑う者、汚す者……許せるはずがなかった。信じられるはずがなかった。こんな奴に……こんな屈辱をっっ！
握った大太刀を振り上げ叫んだ。
「許さない！　許してたまるか！　貴様だけはぁぁああっ！」
けれど振り上げた刃が、仇敵に届くことはなかった。
カランという乾いた音が鳴り、業物の刀が木造の床に転がる。咲夜は、気が抜けたように両手を床について倒れ込んだ。
「やはり、斬れるわけがありませんなぁ」
そうなることなどすでに予想済みだといわんばかりに、小柄な老人がニタリと笑う。
「くっ……くそ……う、ぐぅっ」
切れ長の瞳を最大限まで鋭くして、男を睨み付けた。感情はすでに怒りと憎しみで振り

切れている。今なら地獄の鬼でも斬れる気がした。
しかしダメなのだ。目の前の男を斬れば、母は本当に死ぬ。肉体や精神だけでなく、死まで汚されてしまう。
悔しさと切なさに揺れる少女の顔が、苦悶の表情に震える。
（わたしは……何もできずに。また……見ているだけで……っ）
九年前の記憶が蘇る。炎の中で妖夷に連れ去られる母をただ見ることしかできなかった幼い自分。その弱かった、何もできなかった無力な自分が嫌いで、剣の腕を磨き、悪に屈せず凛として生きてきた。なのに――。
「姫様は決して私に手は出せない――おわかりいただけたようですな。そこで姫様にお頼みしたいことがあります」
勝利を確信したような表情で、白髪の老人は続けた。
「姫様は母君の代わりに、この祠で巫女の精を吸われていただきます。巫女の精は年相応にならないと活性化しません。そのために九年前見逃してあげたのですよ。母上に比べ姫様はお若い。さぞかし極上の精が絞り取れるのでしょうねぇ」
「くっ……貴様ぁ、どこまで人の心を踏みにじれば……っ」
母だけでは飽き足らず、自分さえも己の道具に……しかも見逃してくれた……？　苛立ちが黒い瞳を血走らせる。視線で人が殺せるならば、どれだけいいだろう。
「いいですよ、姫様。その悔しさを前面に出したお顔。そそりますねぇ――ですから、姫

様には逆転する機会をお与えしましょう。伸由！」
呼ばれて、今まで黙っていた伸由が近づいてくる。
「お、お前……っ⁉」
二目と拝めないほどに潰したはずの伸由の顔は、すでにいつものにやけ顔に戻っていた。
「まったく、かっこ悪いところを見せたな。俺様も親父ほどじゃないが、自分の中で妖夷を飼いならせるんだぜ？　ははっ」
響く耳障りな笑いに、情けなどかけず首をはねてやればよかったと本気で思った。母上を直接犯した罪は、なによりも重い。この男も決して許すわけにはいかない。
「さて、姫様。これから我が不肖の息子、伸由が姫様を淫らに調教します。期限は、そうですね。十日といったところでしょうか？　姫様はその間、ひたすら堪えてください。ええ、堪えてくださるだけで結構です。十日後、それでも姫様が気丈な理性を保っていられましたら、母上はお返しいたしましょう。どうですか、姫様？」
「くっ……下衆め……ぇっ」
十日間……その間、ただ快楽に堪えるだけでいい。いいようにされるのは屈辱ではある。けれど、ただ堪えるだけだ。強靭な精神と気高い誇りを保ちさえすれば、なんの問題はない。姫である自分にはそれだけの覚悟がある。快楽などという下劣な感情に流されるはずもない。
「好きにするがよかろう……じゃがな、伸盛。わたしは必ず母上を助け出してみせるぞ！

必ずな！」
「いいでしょう。せいぜい頑張ってくださいませ。それでは後を任せたぞ、伸由」
言って老人は、祠の出口へと消えていった。
「さて。ということだな、咲夜」
見上げると、残った伸由がニタニタといやらしい笑みを浮かべていた。
暗い部屋に二人きり。そして絶対的に自分有利な状況。単純な優男がこれ以上ないほどに興奮している様子があからさまにわかる。
咲夜は、肩をすくめておどけてみせた。
「ふっ、お前にわたしを組み伏せることができるじゃと？　お笑い種じゃの。自分より弱い女しか抱いたことがない男になにができるというのだ？」
挑発、というよりも素直な本音だった。
母親を人質に取られている以上、こちらからうかつなことはできない。けれど負ける気はさらさらなかった。堪えろというのならば、堪えてみせる。堪え抜いて必ず母親を助け出してみせる。
「随分強気なんだな。まぁ、そこが俺様の将来の妻らしいが。咲夜、お前は本当の俺様を知らない。そして、お前自身も本当のお前を知らないんだよ」
人であることを捨てた男がニタリと怪しく微笑む。
「俺様が本当のお前を引き出してやるよ」

「やれるものならやってみればよ……い……くっ、うううぅっっ!?」
こちらの言葉を遮るように、ジュル、ジュルジュル――と男の袖口から溢れた触手が、纏った赤い鎧に巻きついてくる。
（くぅっ、こんな……べとべとして、気色悪い……っ）
今までは触手などすべて一刀の下に斬り伏せてきた。しかし初めて感じる化け物の触手は、まるで泥沼から出てきた野太い蛇のように、鎧の上からゆっくりじわじわと少女の身体を這いずり回る。
「は……ぅっ、こんな、格好……っ」
暫くすると、幾本もの触手が咲夜の全身に絡みあうようにのたうっていた。
胸や肩、足首を包む鎧の上から、まるで米俵を縛る荒縄のように赤褐色の肉紐がギュギュッと絡みついている。
手甲を付けた両の細腕がグルリと巻き上げられ、まるで釣り上げられた肉厚の魚のように、わずかに天井からぶらさげられている格好だ。
胸鎧の内側に入り込んだ肉触手が、少女の豊満な乳房を白衣ごとムギュッと縛りつける。圧縮され一回り以上肥大化した美乳が、外側から押し付けている鎧の間でスイカのように張り詰める。
まるで大量のウナギが泳ぐ生簀の中に放り込まれたかのように感じる。こちらの羞恥心などまるで考えず蹂躙する触手たちに悔しさが込み上げる。

磨き上げた鎧の輝きとはまったく別の、ヌメついた粘液のてかりが妖しく光る。自分が妖夷の一部になってしまったようで、肌に寒気が走り、おぞましいまでの嫌悪感が生まれた。
「くく、恥ずかしがらなくてもいいぞ。お前は魅力的だ。触手に嬲られる姿が実に映える」
「なにをバカなことを……っ。ふん、まるでたいしたことはないな。こんなのがお前の本気じゃと？　随分と安い本気なのじゃな」
そうだ。今はただひたすらに耐えなければならない。母のためなら、こんな下衆に恥を晒すくらいどうということはない。
「これが本気だと？　お前の方こそ、俺様を見くびり過ぎなんじゃないのか？　妻になるならば、もう少し夫を過大評価してもらいたいものだな」
「誰がお前の妻などに……こんな、く……化け物の力に溺れおって……っ」
「溺れるのはどちらかな？　言っただろう、あまり見くびらない方がいいと」
男の瞳が、今まで見たこともないギラついたものに変わる。瞬間、予想もしなかった事態が、咲夜の本能を直撃する。
「う、んくっ⁉　は、ぁぁ……」
いきなり全身に電流が走った。突然のことに理性がまるで対処できずに、唇から甘い声が漏れる。全身の汗腺がブワッと開き、甘酸っぱい臭いが股間から湧き上がってくる。
（な、なんじゃ、と……身体があつ、い……ぃっ⁉）

思考が事態を把握するより、ギチギチに縛られた女の肉体の方が敏感に反応した。
まるで内側から薪をくべられているかのように、身体全体が熱を帯び始めている。手足の指先に至るまで全身が軽く痺れ、頬の紅潮とともに吐息がだんだん荒くなってくる。
「はぅ……ジンジンしてぇ……こ、れ……おかし、ぃ……っ」
身体中が痺れているのに触手に絞られている乳房と、身体のちょうど逆三角形の頂点――朱色の袴で隠した股間だけが後から後から熱を帯びてきて止まらない。思わずモジモジと身体を動かしそうになってしまう衝動を、グッと唇を噛み締めて堪える。
「効いてるか？　どぉれ、確かめてやるぞ」
伸由の意思に沿って、数本の細い触手がニュルリと少女の柔肌を滑った。行き着く先はただ一つ。いまだこの世のどの男も触れたことのない、姫君の秘部だ。
「はぅっ！　あ、は……や、やめ……そこは……っ」
初めて受ける異物との接触に、思わず腰がビクンと跳ね上がる。これまであえて意識してこなかった柔らかい部分に、ミミズのような触手が軽く触れてくる。
「おお、どうした咲夜？　顔が真っ赤になっているぞ。やはり恥ずかしいんだろう。ここを弄られるのがそんなに恥ずかしいのか？　ははは」
「だ、黙れっ！　ん、ふぅっ……くっ……だま、れ……ぇっ」
思わず叫んでしまった。
そうだ。伸由の言う通りだ。犯される。快楽に耐えるということが、どんなことかは頭

では理解していた。
咲夜も姫とはいえ年頃の女だ。ふいに股間が、身体中が疼いてどうしようもない夜だってある。姫として情けないと思いながらも、牝の本能に任せて鳴いたことも一度ではない。
その度に、自分の浅はかな思いを知りながら、アソコの張り詰めた部分を撫でる度に、死ぬほど恥ずかしい思いを心に秘めてきたのだ。
（恥ずかしい……こんな、こんな男に、化け物にわたしの大事な部分を……っ）
本当なら今すぐにこの男を斬り倒してしまいたい。けれど、それはできない。絶対にできない。
「どんな感じだ、俺様の触手に弄られるのは？　ほら、わかってるだろ？　だんだん股が震えてきてるぞ。お前の美しく悩ましい太腿が、ピクピクって。いい眺めだな」
伸由は軽く腰を屈めて、わざと自分の目線に身長を合わせて話した。つまり、この男に見えるものはすべて咲夜本人も見ることができる。
（み、見るな……くぅっ、わたしの身体を見るなっ！）
我慢している……いや、感じているのを必死になって我慢している。そんな姿を見られるのが一番の屈辱だった。
昔から、咲夜は伸由を見下してきた。粗野で乱暴で自分のことしか考えていない高潔から対極にいる男など、まったく眼中になかった。
それが今この場においては、立場が完全に逆転している。

ビクッッ！　ビクビクッッ！
「ほぉら、わかるか？　反応している。俺様の動きに女のお前が応えているぞ。気持ちいい、もっと強く……ははは、違うか、咲夜？」
「ち、違う！　わたしはそんなこと思って……ふぅ、ぉぉ……思って、ないぃっ」
ズリズリと、まるで少し固まった筆先でされるように、股布の上から縦に割れた秘裂を弄られる。わずかに湿った白い生地が、触手にぐにっと押しつぶされ、ビクビクと小刻みな痙攣を起こす女肉への密着度を増していく。
なんとか男の顔を睨み付けるが、それだけで精一杯だった。もどかしく募る屈辱感だけが、チカチカと明滅する理性を支えている。
「強情な奴だな、まぁ、そこが俺好みではあるな。もっと悶えてくれよ、なぁ？」
「くぅっ、貴様……媚毒を……は、く……卑怯ものめっ」
妖夷の体液はそれ自体が強力な媚薬だ。身体に塗り込まれるだけで女の本能を刺激し、張り巡らされた官能神経を呼び起こし、過敏にする。
鎧、そして襦袢の内側を這い回る肉触手によって、少女の白い肌はうっすらとした紅色に染まりつつあった。妖夷の体液なのか汗なのかわからないベトついた粘液が、全身をくまなく覆いつくしている。
「はぁ、は……ぁ……う、く……ぅっ」
吐き出す息が、意図せずだんだん甘く悩ましい色を帯びてくる。眉根がわずかずつだが

垂れ下がり、瞳の黒がわずかにかすれる。
女肉のたっぷり詰まった熟れ尻や太腿、赤い胸当てに押さえつけられた若い乳房に至るまで、ピクピクと小刻みに震え、ほんの少しずつ張りと弾力のあるものへと……女武者から只の女へと。本人の意思とは関係なく肉質を変化させていく。
「なんだ、もう足がガクガクいってるじゃないか？」
「……っ、違う！　これは……」
「立つのが辛そうだなぁ。だったら手伝ってやるよ……はっ」
掛け声とともに、蠢いていた無数の触手の何本かが寄り集まって、目の前で一つの巨大な触手へと変貌する。大きさは咲夜の絞れた腰周りほどはあるだろうか。まるで太い丸太のような触手が、意思を持っているかのように先端をウネウネと奇怪に動かす。
「な、なにを……する気じゃ⁉」
「言っただろう、立つのを助けてやろうというんだよ」
「やめろ……手助けなど……っ。ふぁ、くぅぅぅっっっ！」
寄り集まった巨大な触手は、ナメクジのように鈍重な動きで、咲夜の股間に近づくと、プルプルと我慢の痙攣を起こしている股を強引に割り裂いた。
赤い姫武者も必死の抵抗を試みたが、脚が痺れている上に、艶かしい太腿や足首に巻きついている触手たちの力は、情欲に駆られた牡獣のように強力だった。
ジュルルッッ……ズリズリ……ヌチャァァ……。

『第五章　戦姫汚辱』より

汚い角材で作られた頑丈そうな十字型の恥刑台に、少女は屈辱の逆さ吊りに処されていた。

本来は両手を括りつける横の棒に、両脚を逆ハの字型を通り越したほとんど棒と平行に大きく開かれて拘束されている。

膝を棒に引っ掛けられており、カクンと折れ曲がり美味しそうな美脚の膝下がブラブラと宙に浮いていた。

ムッチリとした太腿が、まるで炎で炙られる牝鹿の脚のように艶かしい。逆さに緊縛された女武者の肉体が、きつく締め付けられた荒縄の刺激によって絶えることなくビクビクと快楽痙攣を起こしている。

「んぐぅぅっっっ！　おほぉぉっっ！　んぐんぐっっ！　んぉぉぉっっっっっ！」

ビクンッッ！　ビクビクッッ！

ふくよかな唇から、野太い牝獣の嬌声が発せられた。

自ら男たちに媚を売り、全身に汚らしい白濁をぶちまけられた姫武者は、牡本能に完全に火が点いた無数の男たちの、尽きることのない性欲のはけ口に成り下がっていた。

「へへ、まぁたイキやがったぜ……もう何回目だ姫武者さまよぉ？」

「バカ野郎。もう本人だってわかっちゃいねぇさ。くく、でもまだだぜ。なんせ俺たち貧民街の連中は、とんと女になんか縁がなかったんでね。一晩中でも付き合ってもらうぜ、この変態武者様！」

ブベチャァァッッッ！　ブチョオオオッッッ！

薄め損なった糊のような精液が、宙吊りになった黒髪の少女に見舞われる。すでに身体中が濃い白濁で塗りたくられており、真紅の鎧を汚辱の白が染め直す。

（うぁぁっ、くぉっ……あ、頭が焼ける……っ！　口の中……ベトベトで……ほぉぅっぅ！　擦られてイクッッ！　民のオチンチンでわたし……壊れる……ぅぅっっ！）

口にはすでに二本もの剛直が突き込まれ、ジュブジュブと交互に少女の柔らかい唇と舌の感触を楽しんでいる。いやらしい唾液が突き込まれた肉棒を温かく包み、自分は男のきつすぎる牡臭を唇いっぱいに溜め込んでいた。

激しさを増す突き入れは喉の奥にまで亀頭を送り込み、まともに呼吸することさえ許さない。

「んぼんんっっっ！　んお、イ……イイッッ！　んぐちゅぅっ……んはぅっ、イグッッ！　イグゥゥゥッッッ！」

アソコと同等の性感帯となった唇が、歓喜の悲鳴を上げ続ける。舌先で感じる男根のゴツゴツした熱い感触が甘い痺れを強要してくる。

民たちの前だと、彼らを助けるためだというのに、はしたない牝声で〝イク〟という快楽絶頂を全肯定するいやらしい言葉が無意識に飛び出してしまう。

「うほぉっ、気持ちいいぜ……さすが姫武者様の肌はすべすべで最高だぁっ！　モチモチしててチンポによく馴染むぜ！」

陵辱されているのは、もはや口内だけではなかった。卑猥に改造された赤鎧から露出した生肌には、いきり立った男たちの劣情の塊たちが押し付けられている。
ゴシュゴシュッッ！　ヌチョ……シコシコ……ッ！
咲夜のきめ細かい色白の肌に、不潔極まりない浮浪者たちの肉棒が気遣いなしに擦りつけられている。湧き立つ女の汗で湿った両脇はもちろんのこと、ほどよく鍛えられ脂の乗った腹部。それにキュッと引き絞られた細い腰周り。大開脚を強制され、いまだに触手張型がヴヴンッッと蠢く股間の爆発を一身に受けているムチムチの太腿。
果ては、色っぽいうなじや、張り出した肩甲骨。さらにはイクたびにビクつく震えが堪らない仰け反りかえった背中など、擦りつけられそうな部位にはほとんどすべて、男根が激しい前後運動をし続けている。
「んあああっっっ！　ひぎぃぃぃっっっ！　はんぉっ……むぉぉぉぉっっっ！」
（あ、熱い……ぃぃっっ！　オチンチンでいっぱい……頭の中いっぱいぃぃっっっ！）
小さな身体全体にネチョネチョした白濁がぶちまけられ、上から下へと零れ落ちていく。ボトボトと顔に向かって降ってくる白い異臭の塊に、気高い理性が悩乱する。
両手両脚がきつい紐で引っ張られているかのように、ビククッッ！　と突っ張る。わずかに浮いた腰がグンッッ！　グンッッ！　と別の生き物のように跳ね回り、悩ましい腰踊りを披露してしまう。
「おい、手が休んでるぜ！　てめぇ、慰安奉仕にきたんだろうが！　さっさと扱けよ、こ

の淫売が！」
「わ……わかっ……んごぉおおっっ⁉　おぶぁっっ！　んは……ひぎぃぃっっ！　わ、わかり……ましたぁぁっっ！　させていただきますぅぅっ！　手でも足でも……なんでもぉぉおっっ！」
必死に使命感に堪える少女が、男たちの止むことのない劣情の渦に呑み込まれていく。
唯一自由な両手は、刀の代わりにビキビキにそそり立った男根を握らされ、それぞれ五本の指すべてを使って丹念に扱くことを命令されている。
絶頂痙攣に先端まで硬直させている足指もそうだ。具足を脱がされ、一本一本の指で差し出される肉棒をシコシコと扱き抜いていく。興奮しきった男たちの迸る男汁が、指と指の間にまで糸を張り、爪の中にもベトベトした感触が侵入してくる。
「ひぎぃっっ！　んむぐぅぅっっ！　ふぅぅんっっ！　んんっっ、んんじゅぷぅぅっっ！」
最も屈辱的なのは、垂れ下がった黒髪で剛直を扱かれることだった。母親譲りの艶やかで美しい黒髪も、理性をなくした男たちの標的となる。
「うへへ、気持いいっっ！　たまんねぇぜ、こいつは！　すべすべサラサラしてチンポに食いついてきやがる！　おぉぉっ、このしっとり感が最高だぁっっ！」
巻きついた髪の毛から勃起した逸物の熱さや固さ、蠢く感触までもが伝わってくる。ツルツルだった髪はすでに白濁と先走り汁にまみれ、卑猥な艶を残すのみだ。
（く、狂っておる……こんなの……わたしは……いったいどうなって……ぇぇ……）

バカにされて嬲られてそれでも……いや、だからこそ肉棒に奉仕したくなってしまう異常な感覚が、身体を支配している。

屈辱の逆さ吊りにされ、とめどない精液で自慢の赤鎧もドロドロにされてしまったのに、今まで以上に積極的に快楽を求めてしまう。正義の姫武者の奥にしまっていた、被虐の牝本能が、咲夜の精神と肉体を確実に蝕んでいく。

「ふぐぅぅんんっっっ⁉　おほっっ……んぐ、ふむああああっっっ！　ひぎぃぃぃぃぃっっっっ！」

快楽と羞恥に沈んでいた咲夜の身体が、いきなりグンッッ！　と跳ね上がった。身体全体が大きな弧を描くように仰け反って、開いた太腿がおかしいくらいにビクッ！　と痙攣する。

「おい、見てみろよ！　すげぇ反応だぜ！」

「うは、ほんとだ。この人ってあの姫武者だろ？　なんだよ、只の淫売じゃないか」

霞む瞳で見れば、逆さ吊りにされた少女の上。数人の子供たちが磔台によじ登って、こちらを嘲っている。

（な……なぜ子供が⁉　あぅ……こんな格好……子供にまで……っ）

予想もしなかった事態に少女の羞恥心が激しく動揺した。欲望に心躍る大の男たちならばともかく、まだ穢れを知らない子供の視線は痛すぎる。

しかも子供たちは、不気味な張形のために放っておかれている女の秘芯に並々ならぬ興

味を持っているようだった。
「おもしれぇな、コレ。姫武者様の身体が震えまくってるぜ」
先ほどの股間に対する不意の一撃も彼らが掌で張型を押さえつけたものだ。突然の淫撃によって目覚めた牝本能の中心が白濁の姫武者にさらなる快楽を植え付ける。
「ひゃ、ひゃめっ……ほ、ほまへはひ……んぷっ、み、見るな……見てはなら……ひぐっっ！　んぁっ……はおおおおおおっっ！」
懇願の言葉が一瞬にして遮られる。わずかに張型を押さえ込まれただけで、全身の細胞が沸騰したような熱さが身体の隅々を蕩けてしまう。
唇から濃い涎が弾け飛び、淫らなアヘ顔が白目を剥く。張型を咥え込んだ股間がブルブル震え、ギュンッと引きつった太腿の鍛えた筋肉の線が明確になる。
「すげすげぇっ！　見たかよ⁉　〝はおおおっっ！〟　だってさ。きゃははっっ！」
「穴がヒクヒク震えてるぜ。うぇ、なにこの臭い⁉　臭すぎだって……なんか変な汁まで出てきてるしさぁ」
所詮まだ子供だ。女の快感がどんなものかなど詳しく知るはずもない。しかし彼らとて牡なのだ。確かに薫る牝の発情臭と快楽に吼える牝猫を前にすれば、おのずと獣の本能が動き出す。
「なぁ、コレ、一気に抜いてみようぜ」
「ああ、いいなぁそれ。きっともっとすごい声で鳴くぜ。なんか俺ゾクゾクしてきた」

純粋すぎる加虐心が、単純な答えに辿り着く。猛る欲望を隠せない少年の手が、ガシッと張型の底を握った。
「う……嘘……そん……っ」
少女の背筋を旋律が駆け抜ける。あの張形は今ズッポリと膣内に呑み込まれている。しかも表面には女を狂わせる無数のイボ付きだ。それをもし力任せに引き抜かれたとしたら……。
「やめ……やめるのじゃお前たち……っっ！　それを弄っては……なら……んんんっ！」
「なんだよ、邪魔すんなって変態女武者！　さぁ、やるぞっっ！」
少年たちの顔に、年齢に不釣合いな攻撃的な表情が浮かぶ。
（く……ああ……そんな……頼む……やめ……）
咲夜の心が恐怖に震えた。心臓がどんどん高鳴っていく。
ズブチャッッ！　ズジュルルルルッッッッ！
「んきゃほおおおおっっっっ！　あ、ああ……ひぐあああああっっっっ！」
今までのどんな快楽をも上回る桃色の衝撃が、少女の理性を瞬きよりも速く焼き尽くす。圧倒的すぎる火花が頭を真っ白に染め抜いて、気高い姫武者の心が天に目掛けて昇り詰める。
「おおおっ！　イグゥゥゥッッッッッ！　アソコイグッッッ！　わらひ、飛ぶぅぅぅぅっっっっ！」

身体のすべてが痙攣し、ありったけの力が喉から獣の咆哮となって快楽を叫ぶ。膣内を一瞬にして駆け上ったイボイボが敏感すぎる女壁を容赦なく蹂躙した。まるで剥き出しの快楽神経を根こそぎ擦り上げられたような、常軌を逸した淫炎の爆発に絞り込んでいた肉壁がさらにキュキュゥゥッッと収縮する。

濃い本気汁が怒涛のごとく溢れ出し、奥にある子宮までがカッカッと燃え盛る。

「あひゃおおおっっっ！　イグイグッッッ！　もう狂うっっっ！　ああっっ、気持ちイイッッッ！　気持ぢイイッッッ！　ぎもぢイイイッッッッッ！」

もし今の自分の表情を見せられていたら、もう二度と起き上がることはできなかっただろう。瞳がひっくり返るのではないかと思えるくらい、完全に白目を剥いた切れ長の瞳に、ただただ感じている簡単な一言を叫び続ける唇。舌は力なくダランとぶら下がり、口の中に溜まった精液や涎をぶちまけながら、それでも鳴き叫ぶ。

姫として、武者としての自尊心など欠片も残さず吹き飛ばされた黒髪の少女は、どんな娼婦も及ばないアヘ顔を見せつけながら、ただ天に向かって飛翔した。

「あへぁぁ……ふぉおおおおっっっ……おほ……ふぅぅぅぅっっっ」

屈辱の逆さ吊り状態で大きく肩で息をしながら、巨大すぎる絶頂の荒波の余韻に浸る。屈辱の中での唯一絶対の至極の時間――しかし、快楽に呑まれた偽りの姫武者にそんな休息などあるはずがない。

ズチュチュチュッッッ！　ズボボボッッッッ！　ズブブォオオッッッ！

「はっおおおおおうううっっっっ！　んああっっっ、くぁ……おおおああああっっっっ！」
先ほどよりもさらに野太くなった牝の絶頂嬌声が夜の貧民街に轟いた。先ほどで限界だと思われた艶やかな肢体が、さらに大きく淫らに躍動する。
「んあっっ！　こ、これすご……すごすぎるよっっっ！」
「ほ、ほんとだ……勝手に吸い付いてくる！　気持ちよすぎ……っっ！」
「突きまくれ！　お前ら……くっ、このアバズレ武者様をもっとイカしまえっっ！」
ズボチュッッッ！　ヌチュァァッッッッ！
（こ、こんな……三本……子供にぃぃっっっ⁉　ひゃおおっっっっ！）
まだ絶頂から下りきっていない過敏すぎる膣内には、張型の代わりに子供たちの肉棒が、同時に三本突き込まれていた。
どうにもできない欲望を、子供たちは目の前のヒクつく穴に向かってぶちまける。男根の大きさははっきりいって貧弱すぎる。極太触手や、伸由の剛直に慣れてしまった女武者にすれば、つまようじみたいなものだ。
「三本、すごぉぉぉぉっっっっ！　一遍にぃぃぃっっ⁉　三本のオチンチンんっっっっ！あきゃうぅぅっっ！　ズコズコ擦れてぇぇっっっ！　ぎもぢイイッッッッッッ！」
細いといっても三本集まれば、それはすでに立派な剛直だ。しかも技巧を持ち得ない代わりのとてつもない高速挿入に、長さを補う一点集中淫撃。小ぶりながらブワッと広がっ

たカチコチの雁首がまったく異なる拍子で、女の決定的な弱点の一つである膣裏の入り口を徹底的に擦り上げる。

ジュリジュリィィッッッ！　グチュグチュッッッ！

「へへ、オチンチンだってさ……なにかわい娘ぶってんだろなっ」

「チンポだよ、姫武者さまっ！　それにココはオマ〇コって言うんでしょ⁉　ほら言ってみてよっっ！」

狂ったように悶えまくるムチムチの少女の肢体に、子供たちの牡欲が理性を一気に引きちぎる。被虐に燃える赤鎧の武者の心を覗き見するかのように、徹底的に淫獄の沼地へと引きずり込もうとする。

「そんなぁ……そん……はしたないことぉおっっ！　あぎぃぃぃっっっっ！　あぅくっっっ！　ふおおおっっっっっ！」

（ああ……燃えるぅぅっっ！　もう無理ぃぃっっ！　どうなってもいい……わたし……気持ちよければイイイイッッッッ！）

衰えることを知らない苛烈な三本同時突きに、女武者の凛とした心がズブズブと沈んでいく。ついさっきまでイキながらも苦しそうな表情をしていた美貌が、今ではすっかり蕩けた色狂いのものに変わっている。誰が見ても男とまぐわうのが気持ちよくて堪らないのだとわかる、お硬く凛々しい姫君とはまったく対照的な悦楽の笑顔。

ズボボッッ！　ビチュチュッッッ！

「おおおっっっ！　チ、チンポいいのぉおおっっっ！　ああ、オマ〇コ最高よぉおおおっっっ！　苛められるのがイイのっっ！　そうなの、わらひは子供にまで犯されて……ぇ、精液まみれで悦ぶ最低の姫武者なのよぉおおっっっ！」

今の自分を認めた途端、お腹の奥でゴボッという音とともに、大量の淫液が膣内の肉棒たちに噴射される。湯立つほどの熱気と男を一瞬で牡に変える発情臭がブワッと全身から放散された。

「うおおっっ、口の方もよくなりやがった！　へっ、ガキにぶち込まれて本性見せやがったな。お望み通り一晩中犯してやるよっっ！　色情魔の姫武者様！」

牡欲に呑まれたのは子供たちだけではない。身体中に勃起肉棒を次から次へとなすりつけ、赤い鎧をベトベトの白で塗り替えていく男たちもまた、人としての一線をとっくの昔に飛び越えていた。

ゴチュゴチュッッ！　ブチュチュッッッ！

「ひあおおっっっ！　おいひいいいっっっ！　精液おいひいでふぅぅうっっ！　ああ、もっとぉぉ、もっとかけてくらはいぃぃっっ！　男汁まみれの姫武者はぁぁっっ、一晩中あなたたちに奉仕ひまふぅぅっっ！　だからもっと気持ちよくひてぇぇぇっっっっ！」

両手、両足、さらには口と陰唇……身体中のすべてを差し出して男たちの滾る剛直を扱き抜いていく赤い武者には、すでに正義の味方と称えられた輝きはない。

淡い月光に鈍く反射する濃い白濁の鎧を纏った黒髪の少女は、法悦の表情を浮かべて悶

『第六章　堕落武者』より

「……は、母上……ひぎぉぉぉっっ！　そこおおおっっ！　それ……だめ……イクイク！　感じる……からぁぁっっっ！　おおおおっっっっ！　弾けるぅぅっっっ！　民の前なのに……潮吹いてしま……んあっ、だめ……もうらめぇぇっっっ！」

ブシュゥゥゥッッッ！

肉感のある腰が一際大きく痙攣した瞬間、刷毛触手に嬲られた陰唇から、猛烈な勢いで熱く滾った本気汁が噴き出した。ビュルビュルッッ！　とまるで小水のように、きれいな放物線を描いて、無数の蜜粒が放散される。

「人前で潮吹きとは……どうしようもない変態ですな」

「まったく。貧民街での噂といい、化け物に犯されて感じる露出狂の変態女だったのですよ、姫様は。あんな牝豚に仕えていたかと思うと……」

民衆だけでなく城内の臣下の者たちからも放たれる辛らつな言葉が、快感に酔いしれた咲夜の理性に切れ込んでいく。彼らのほとんどが伸盛たちの配下になっているとはいえ、幼い頃から九年間保ち続けてきた気丈な心が、恥ずかしさと情けなさで突き崩される。

（き、気持ちイイ……ッッ！　ああ……ゾクゾクするぅぅっ！　だめなのに……いいいっ！　母上に嬲られると……皆に罵られるとぉぉぉ……燃えるぅぅっっっ！　身体が底から燃え上がるぅぅぅっっ！　欲しい……欲しい……欲しいいいいっっっ！）

握った掌に愛用の長刀はすでにない。自らの固い信念を具現化したような灼炎の鎧は、無残にも改造し切り裂かれ、今では少女を淫らな情婦に貶める只の淫具と化している。

救いたかった母親や、守りたかった民たちからも変態女と見下され、憎んだ仇敵には結局意地の一つも見せることができなかった。

「イ……イク……ま、たぁぁっっ！　母上にイカされるっ！　触手に……弄られて……嬲られて……んお、おひ……ふおおおおっっっっっっ！」

ただ今あるのは、全身で炸裂する圧倒的な甘美感だけだ。恥知らずにお尻を振り乱し、思いのままに鳴き叫ぶ。

姫としてお淑やかに、そして女武者としてきつい剣の修行に耐えてきた今までの人生では、決して感じたことのない――これまでの経験すべてを超越する気持ちよさが目の前にはあった。

この恥辱に耐え抜いて、本懐を果たしたいという想いは、まだわずかにあった。しかし、それはもうできない。もう自分はこんな昇天してしまうほどの快感を知ってしまった。すべてを投げ出し、淫堕に沈んでも構わないと思えるほどの素晴らしすぎる絶頂感を体験してしまった。

いつの間にか限界まで膨れ上がった肉触手を、うっとりとした瞳で見つめていた。突き込まれるだけでは足らない。締められるだけなんて我慢できない……っ。決して思ってはいけない言葉や感情が、桃色の花園に染められた頭の中を駆け巡る。

姫として、女武者として最低の思考。それはわかっている。けれどこんな気が狂うほどの快楽は知らなかった。わずかに残る誓った勝利への想いが、爆発する牝の炎に溶かされ

ていく。
「ああぅ……もっとしてぇ……！　母上……咲夜にぃいっっ！　もっとたくさん嬲ってぇぇっっっっ！　まだまだ足りないのぉぉっっっ！　身体中がイキたくてイキたくて堪らないのおおっっっ！」
赤い鎧を纏った黒髪の少女が、まるで狂った売女のように快感をねだる。妖夷と化した母親に捕らえられたまま必死に媚を売る姿は、卓越した剣の使い手である姫武者とはとても思えないほど、淫らで倒錯的なものだ。
「素直になったわねぇ咲夜……ではあなたの身体も心もあの方に捧げなさい」
「ようやくか……待ちすぎて暴発しちまうところだったぜ、ははっ」
女の言葉と同時に、袴姿の伸由が緊縛状態の咲夜の前に、いつも以上にニヤついた表情で現れた。
その姿はすでに人間のものではない。先日、祠で見た伸盛と同じ……いやそれ以上に醜悪な化け物の身体になっている。
人と呼べるのはもはや男の顔だけだ。身体は巨大な赤黒い肉塊と化しており、四肢すらもない。代わりに無数の触手があらゆるところから生えており、グネグネと卑猥なうねりを見せている。
「さぁ、咲夜……婚礼の最後の儀式だ。俺様の妻……いや、牝奴隷となることを誓うか？」
男は、身体中からビチャビチャとした不気味な赤い汁を垂れ流しながら言った。

「く……ああ……め、めす……どれ……い……ぃぃ」
口に出した言葉の淫靡さに、思わず身体がブルッと震えた。今まで断固として拒んできた男への屈服心がムクムクと芽生える。
「はぁ……はぁ……あ、おおおおおおおっっっっっ！」
月に向かって吼える狼のように、黒髪の緊縛武者は、自身が最も憎んだ男と触手に向かって、悦楽の咆哮をした。
まるで砂漠で水を請う人のように、舌がだらしなく唇から漏れている。眉根は垂れ下がり、額からは絶えることのない欲情の熱気で生まれた汗が、次々と頬や鼻を伝い落ちる。
呆けた瞳の前にあるのは、無数の触手だ。母を奪い、自らを汚した忌むべき異形の魔手。しかし、それは最高の快楽を与えてくれる淫具でもある。何度も自分を汚し、肉に悶える悦びを教え叩き込んでくれた至上の責め具――。
「は……はいぃぃ……わたしは……咲夜はぁ……伸由……さまの……妻に、め……牝奴隷になりますぅぅっ！」
気丈な言葉を発してきた唇から出された屈服の言葉。
これまで守ってきた気高い自尊心や秘めた想いを投げ捨て、堕ちた姫武者はできうる限りの猫なで声で、巻き起こる疼きを癒やしてくれるよう懇願する。
「ああ、だから……だから早くなんとかしてください……締められるだけじゃ……見られるだけじゃだめ……なんです……挿れて……そのぶっとい触手をわたしのココに……おお

っ、牝マ〇コにぃぃぃっっっ！　ほら見てくださいぃ、もうドロドロなんですぅぅっっ！　欲しくて欲しくて蕩けちゃいそうなんですっっ！　ああっっ、後生ですからぁあっっっ、さっさとぶち込んでくださいぃぃぃっっっ！」

黒髪の少女は、数日前までは考えられなかった卑猥な言葉を恥じることなく並べていく。いや、恥ずかしいとは思っていた。けれどその羞恥心すら快感だった。

悩ましくゴクリと喉を鳴らすと、自らグイッと大きく股を広げてみせる。その中心には、妖艶に咲き誇る満開の花園が大きく口を開け、蜜をダラダラ垂らしながら、堪らない疼きを埋めてくれるのを今か今かと待ちわびている。

「くくく、ははっっ！　そうだ、それでいい……やはりお前は俺様に屈服する様が一番似合う。はは、望み通りに挿れてやるよっっ！」

飼いならされた牝猫のように、背筋をビクつかせながら甘く蕩けた表情を見せる女武者に、伸由の顔が加虐的な感情を露わにする。

ビジュルッッッ！　男の袖口から伸びた幾本もの触手が、火照りきった戦姫へと、その凶悪な本性を剥き出しにした。獲物を見つけた蛇のように、一度鎌首を持ち上げてから、一気に標的へと突撃する。

ジュズボォォォォッッッッ！

「イッ……ひぎぃぃぃぃっっっっ！　あおぉぉっっ！　入ってる！　イイですぅぅっっっ！　ああ、イクイク！　ふおぉぉぉぉうううっっっっ！」

蜜汁で湿りまくった牝壷に、極太の触手が問答無用で侵入する。普通の女性なら壊れてしまいかねない人間の腕ほどもある触手を、咲夜の女唇はいやらしい屈伸運動で、牝の奥へ奥へと積極的に誘っていく。

「ぎ、ぎもぢいいっっっっっ！　伸由さまのぉぉぉっっ！　ひぎゅぁぁぁっっっっ！　ズコズコくるぅぅぅっっっっ！　イイですぅぅっっ！　抉るのぉっ！　咲夜の膣壁ぇっ、ギュルギュル扱いて……最高ですぅぅぅっっっっ！」

野太く艶のある声が広場を含めた城下一帯に響き渡る。ヌチャヌチャという淫らな水音が少女の股間から鳴り、太い触手がズブズブと出入りする度に身体が大きく仰け反って跳ねる。

「あああっっ！　おほぉぉぉっっ！　くるくるぅぅっっ！　肉触手がぁぁっっっ……わたしのすけベマ〇コ……んおおおっっ、堪らないぃぃっっ！　ほおうっ、おかしく……おおっっ、ぎもぢよすぎるぅぅぅっっ！」

イボ付きの触手で全身をくまなく刺激され、絶え間ない淫電流が頭の中を駆け巡る。

十数本の触手に豊満な乳房を根元、そして色づく乳輪を幾重にも締め付けられ、胸が蕩け落ちてしまいそうに燃える。

凛とした美貌は、すでにどうしようもないくらい翔んでいた。まるで麻薬中毒者のような狂い顔は、白目を完全に剥き出しにし、舌先が牛のものか何かのように、ダランと伸びて、柔らかそうな唇の端にぶら下がっている。眉毛はハの字を通り越した異様な曲がり方

で、眉間にはきつく皺が寄っている。
ギルチュァッッッ！　ジュチュチュウッッ！
「ひ、ぎ……ああ、胸ぇぇっっ！　乳首……もっとしてぇっっ……ぉお、引っ張られるのぉっ……ひどくされるの……堪らないぃぃっっ！」
親指大にまで充血し、カチカチに勃起した乳首を細い肉紐がギチリュッ！　と締め付けて乱暴にビィンッと引っ張る。下手をすれば乳首が引きちぎられそうな壮絶な痛みですら、被虐の快楽に堕ちた姫武者にとっては悦びだ。
ギチギチと引っ張られ、また緩められる度に、スイカのように丸々と実った乳房がブルンブルンと悩ましげに大きく揺れる。
「あら、まだこっちの穴が残っていますわ。伸由様、わたくしが悦ばせてあげてもよろしいでしょうか？」
言って、妖夷と化した母親は、寂しそうにヒクヒクと閉じたり開いたりを繰り返している少女のお尻の穴へと、逆立った剛毛触手を近づける。
「はは、尻の穴か。ああ、いいぜぇ！　よかったなぁ、咲夜。大事な母上にケツ穴を弄ってもらえるんだからな。どうだ、嬉しいだろう？」
尊敬する母をバカにされ、我慢できない屈辱を強いられる――だが、もうそんなことはどうでもよかった。むしろ苛められるのが嬉しくてどうしようもない。奴隷や家畜のように扱われると気が狂うような快楽に満ち溢れる。

「は、はいいいいいいっっっ！　嬉しすぎてぇぇっっ、またイクッッ！　母上にお尻ぃぃいっっんんっっ、弄られたいのおおっっ！　母上の剛毛触手ぅぅぅっっっ、はおうっ……咲夜の尻ヒダが一生懸命お相手しますぅぅぅっっ！」

肉厚のお尻をブルンブルンと振りたくって懇願する。お尻の中心でヒクヒクと震える秘穴は、すでに奥からトロトロとした腸液を垂れ流しており、与えられない快楽を享受しようとたっぷり詰まった媚肉を艶っぽくテカらせている。

「いい娘ね。ああんっ、燃えてきますわ……咲夜のお尻ぃっ……苛めてあげるわねっっ！」

ギチュルッッッッ！　ジュズルォォォッッッ！

娘を苛める快感に身悶える后の意志を映したように、太い触手がズルンッッと勢いよく跳ね上がって、開いた不浄の穴へと突き込まれる。

「ひぎゃおおおおっっっっ！　おお、おおおおおっっ！　痺れるっっっ！　ああ、母上ぇぇっっっ！　わらひのおひり……もうドロドロぉぉぉっっ！　溶ける……肉ビラ、触手に扱かれてぇぇっっっ！　背中にビンビンきまくってますぅぅぅっっっ！」

一気に尻穴をぶち抜いて、女を狂わす剛毛を全身余すところなく携えた触手が、歓喜にうねる腸壁をゴリュゴリュと隅から隅まで一斉同時に扱き抜いていく。

まるで女体専用の剣山で性感帯をこそぎ取られたような衝撃に、堕ちた姫武者が悶え叫ぶ。瞳が悦びに大きく見開き、嬌声を張り上げる唇から涎の粒が飛んでいく。

一本お腹に線が通ったかのように背筋がビクンっっ！　と仰け反り、腰から伸びた極上

の媚肉太股がビィィンッッ！　と生々しく突っ張っている。
「おほほ、すごいわ咲夜のケツマ〇コっっ！　気持ちいいっっ！　母の触手も蕩けてしまいそうですわよっっ！　んぐっ、締め付けて……うねって巻き込んで……ほぉら、もっと苛めてあげますわぁっっ！」
「あひゃぐぅぅっっっっ！　あ、ありがとうごあいまふぅぅっっっっ！　母上ぇぇっっっっ！の、のぶよ……ごひゅひんはまぁぁぁっっっっっ！　く、おおおっっっっっ！　イクイクイクイクゥゥゥゥッッッッッ！」
容赦や愛情など微塵も感じられない突き込みに、少女の理性が粉塵と化し、どうしようもない快楽電流が全身を駆け抜ける。
ブチュブチュという淫らな水音が広場に響き、恥じらいの一つもない獣のような牝声が民衆たちの耳へと届けられる。
「けっ、この牝豚がよぉ。もっと鳴けよ、おいっ！」
「へへ、ここまできたらせいぜい楽しませてもらうぜぇ……すけべすぎんだよ、お前の身体も声も……全部なぁっ」
わずかに視界に入る民衆の呆れ果てた表情に、わずかに残った少女の理性も、その胸に秘めた希望の輝きも失われていく。
（わ、わらひは……牝豚……そう牝豚ぁぁっっ！　母上と一緒にご主人様に一生仕える牝奴隷の豚なのじゃ……おおお、もっと見よ……もっとわたしのイキ様を蔑んでぇぇっっ

っ！）

「は、はひぃぃっっ！　ご主人様ぁぁっっ！　あ、愛するあなたぁぁっっっ！　咲夜のギチュギチュいってる牝豚マ〇コをぉっっ、苛めてくださいぃぃっっ！　んあおおおっっ、燃え上がってもうどうしようもないんですぅぅっっ！　この疼きはすべてご主人様のものぉぉぉっっ！　咲夜の全部をおおおっっ！　汚してぇぇっっっ！　気持ちよくしちゃってくださいいいぃぃぃっっ！」

「はは、もう完全に堕ちたな咲夜ああっっ！　さて親父、もういいぜ。こいつはもう俺様のモノだっ！　所有物だっっ！　ははははっっ！」

高笑いする伸由の声とともに、それまで咲夜を犯していた母親の姿が、ドロドロと粘土細工のように姿を変えた。妖艶な熟女に代わって現れたのは――。

「ふん、たわいのない……まぁ、これでこの国は我が一族のもの……さぁて、姫様。それでは約束通り、巫女の力……たっぷりと味わわせていただきますよ」

現れたのは、伸由と同じように触手の化け物となった伸盛だった。うねる刷毛触手を少女の秘門に突き刺したまま、無数の触手で豊満な肉体を舐め、締め付け、弄りまわしている。

「くく、残念だったな。お前の母親はまだ親父の腹の中さ。さっきのババァは親父の力で作り出した只の化け物だったってわけだ。悔しいか？　助けたかった母親をバカにされて悔しいのか⁉」

「あ、あああっ……あああっっっ！」
事実を知った少女が苦悩の表情を浮かべる。しかし、それは一瞬だった。
（わらひは……わらひ……も、もう……っっ）
ほんのわずかの少女の気丈な意志の光が、フッと消える。
「あ、あぁんっ……ご、ご主人様ぁぁっっ……そ、そんなことはどうでもいいですからぁっっ……もっと、もっと咲夜をぉぉっ……このはしたなくて淫らな牝豚を犯してくださいいいっっ！」
母親のことなどすでにどうでもよくなっていた。そうだ、自分はもう快楽なしには生きていけない。ドロドロに汁を垂れ流し、媚を売り、尻を振って犯してもらう以外の人生など考えられない。
それでいい。もう一生奴隷でも構わない。いや、そうさせてもらえなければ、尽きることのない熱い疼きによって狂い死にすることは間違いない。
すべての時間を快楽につぎ込む。それが復讐と国の平和のために剣を振るってきた麗しき姫武者の出した答えだった。
「んはぁっ……ご、ご主人様ぁぁっっ！　犯してぇぇっっっ！　ズボズボしてぇぇっっっ！　この穴は、わたしはぁっっっ！　んんっ、そのためだけに仕えますぅぅっっ！　したいのっっっ！　マ〇コされたいのぉぉおおおおおおっっっっ⁉　ふぎゅおおおおおおおおおおおっっっっっ！」

再開された触手の突き込みに少女の感情が震えた。全身の産毛が逆立ち、男のモノを締める膣以外の筋肉がまとめて弛緩する。

「ははははっ、いい心がけだぞこの豚姫がぁぁっっっ！　ならば望み通りに犯してやろう！」

「后様ばかりで少々飽きがきておったのでな……咲夜様のお若い身体……とくと味見させていただきますぞっっ！」

ズブチュゥゥッッッ！　ブチュッッ！　ズチュッッッ！　ヌチュオオオオオッッ！

数十本もの極太触手が、赤い変態鎧を纏った少女を思う存分蹂躙する。

犬の体勢から屈辱的なまんぐり返しの姿勢へと変えられ、思い切り開いた股間のワレメに、不気味に蠢く触手がぶち込まれる。ズチュズチュッッ！　と一突きごとに膣道の最深部、子宮口へと男の情欲を叩き込む。

熱く迸る本気汁が、魔根に感謝の熱湯噴射を行っている。溢れた蜜液はジュワッとした水蒸気を伴って、見つめる民衆に甘くてすっぱい発情した姫武者の臭いを届けていた。

「んおおぉぅぅぅっ！　チンポぉ、おいしいぃぃっっ！　触手チンポ最高ぉぉぅぅっっ！　抉ってぇぇっっっ！　牝奴隷のふしだらマ〇コにぃぃっっ！　変態ケツマ〇コにぃぃっっ！　熱いチンポをぶちこんでぇぇっっっ！」

感じれば感じるほどに貪欲さを増す牝膣が、人外の勃起触手をきつく激しく食い締める。絶対に放すまいとギチギチ根元から締め付けて、そこを魔根に生えたイボイボや剛毛で刺

激される。お腹の奥で爆発する快楽は、まるで底なし沼のように、咲夜の心を捕らえて放さない。

赤い鎧は噴出し飛び散った汗と汁にまみれており、ヌルヌルを通り越してベトベトな状態だ。堕ちた主人と同じく、正義を貫いた真紅の姫武者の面影はすでにない。うねる触手に上からなぞられて、纏った少女に痺れるような堪らない快感を提供する只の淫具に成り下がっている。

「く、おおおっっっっ！　さすがの俺様も限界だっっ！　くく、親父……こいつが俺たちの愛の証だ。親父も祝ってくれよ、盛大になぁっっ！」

「くう、いいだろう。ぶちまけますぞ、姫様……いいえ、これからは我が愛しい娘となるのでしたなぁ……わはははっ」

男たちから生える触手すべてが不気味な脈動を始めた。根元から先端に至る肉紐がブボワッッッ！　と弾けそうなくらいに膨張し、ビチッと開いた鈴口からダラダラと動物の涎のようなネトついた男汁が流れて、大開脚を強制されている女武者に垂れ落ちる。

（く、臭いぃぃっっ！　ああ、くるのじゃな……ご主人様の汁が……もうすぐ、もうすぐぅぅぅっっっ！）

満願成就される性欲に胸がこれまでにないくらい高鳴る。すべてを捨てて、牝奴隷に堕ちてまで得たいと思った快楽の果てに心が躍る。

「イクぜ咲夜ぁぁっっっっ！　うお、おおおっっっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!